

# 地方誌の新しい活用方法の提案 ～季刊高知英語版を用いた「高知愛検定」～

1190406 池上由華

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 1. 概要

SNS が目まぐるしい発展を遂げている近年、人々は、目新しい情報に追われ、深く地元の良さを知る機会が薄れてきているように感じる。地域に根差した地方誌を読むきっかけを、より多くの人に持ってもらうことで、より深い意味で地域を愛する人が増えていくのではないかと著者は考えた。そこで本研究では、大学時代にインターンシップがきっかけで、以来アルバイトでお世話になっている、季刊高知編集部編集長の野並良寛氏の協力を経て、地域活性化につながる新しい季刊高知の活用方法を提案する。

## 2. 背景

近年、人々は、テレビやラジオ、本だけでなく、多くの情報をインターネットから得るようになった。インターネットが発展、普及していく中で、インターネットとメディアが融合し、情報を、主にマスメディア等から一方的に受け取る時代から、情報を自分で探す時代に変貌を遂げた。

メディアが目まぐるしい変容を遂げるうちに、マス・コミュニケーションの影響が小さくなってきている。インターネットの普及、特に SNS の普及により、一般市民が反論したり、見方をつくったりする事ができるようになったからである。しかしその一方で、人々の得る情報は、焦点化し、地域の事情を全体像で捉える機会が減ってきている。

## 3. 目的

本研究は、日本メディアの現状を考慮しつつ、季刊高知の良さを活かした、地域活性化につながる新しい活用方法を提案する。

## 4. 研究方法

近年のメディア変動の影響を、少なからずミニコミ（季刊高知のような地方誌等）も受けているのではないかと著者は考えた。ミニコミは、マスコミに対抗する手段としての役割

をインターネットに奪われてしまっているのではないだろうか。日本メディアの現状を考慮しつつ、新たな季刊高知の可能性を発見したい。そこで、メディアの現状についてどのように考えているか等を、季刊高知の野並編集長にインタビューし、季刊高知の特徴を活かせる活用方法を考える。

## 5. インタビュー調査

季刊高知の良さを活かしつつ、メディアの現状を考慮した新しい活用法を考え出すために、まず季刊高知の編集長である、野並良寛氏にお話を伺った。

（季刊高知のニーズ・内容の変化について）

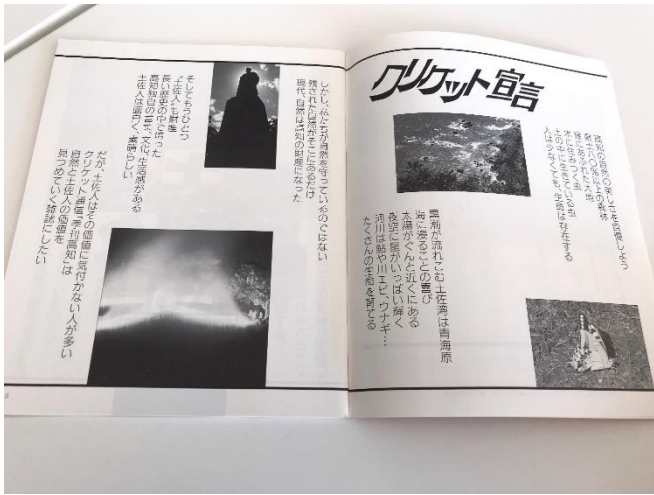
野並編集長：地域活性化、地域で頑張っている人たちや、地域の動きを紹介する役割を僕たちは担当していると思う。だから、内容は変わっていないかな。結局高知は人が面白い。こだわりがある。高知の良さを PR したいという思いでずっとやってきたから。

（SNS について）

野並編集長：拡散力があって、地域のブームを作っていくのは SNS だと思う。でもそこに深度（信憑性・社会的意味・情報発信者の強い意志）があるかどうかは分からない。僕たちは深度を追う仕事をしている。あと SNS は攻撃性が高いでね（笑）

インタビューを終えて、季刊高知はメディア変動に影響を受けるものではないと分かった。季刊高知は、高知の素晴らしさを紹介し続けるという野並編集長の強い意志が具現化された素晴らしい情報誌である。季刊高知は高知の魅力を土佐人に伝えることに重きを置く。初版当初から、このような考え、クリケット宣言（写真1）を念頭に制作されている。クリケット宣言とは、見落とされがちな土佐の自然、土佐人の

価値にスポットを当て、隠れた土佐の魅力を発信し続けるということを表したものである。



(写真1)

また、インタビュー中、深度という言葉が多く使われ、とても印象に残った。SNS と地方誌との違いについて、攻撃性という言葉を使っており、こちらもとても興味深いと思った。この深度と攻撃性についてより深く掘り下げることで、現代メディアにおける季刊高知の立ち位置がより一層明らかになるのではないかと考えた。

## 6. 深度と攻撃性について

インタビュー調査中に野並編集長がおっしゃった、深度と攻撃性について、2つの事件を例に出して、考察を行った。取り扱ったのは、スマイリーキクチ中傷被害事件と、上申書殺人事件である。2つの事件の共通点は一人の人物を事件の陰謀者・当事者として世間に発表したという点である。この2つの事件を比較することで情報誌とインターネット (SNS) における、深度と攻撃性の違いを明らかにする。以下で、2つの事件の概要とメディアにおける違いを考察した。

ネット上で、お笑い芸人であるスマイリーキクチさんが女子高生コンクリート詰め事件に関与していたのではないかと噂が立ち始め、誹謗中傷事件に発展のが、スマイリーキクチ中傷被害事件である。キクチさんは10年間もの間、誹謗中傷を受け続けた。

この事件に関して、拡散された情報に信憑性はない。それに加えて、情報伝達者 (加害者) が、この情報を世間に広め

ようと思った理由に、社会的な意味があるとは思えない。自己完結的な節がある。(ストレス発散・暇つぶし等)

続いて、上申書殺人事件。死刑囚後藤良次が取材記者宮本太一氏と面会したのち、三上静男を告訴する内容の上申書を提出。雑誌「新潮45」が首謀者、三上静男が関与した事件を報道し、告発された3つの事件のうち、日立市ウォッカ事件が刑事告訴された。

後藤の告白後、宮本氏は、すぐに報道せず、裏を取り、事件の真相解明に尽力した。この報道 (情報伝達行動) がもたらす社会的な影響を考慮した行動であるといえる。私利私欲のためではない。宮本氏の正義感の強さ、意思の強さが感じられる。

野並編集長が話していた深度とは、上申書殺人事件の新潮45に見られるような、信憑性・社会的意味・情報発信者の強い意志、これらを指すのではないか。インタビューにおいて、野並編集長は、このように語っていた。

野並編集長: インターネットの娯楽は別になくても困らない。

季刊高知は単なる娯楽としての読み物ではない。土佐人に高知の魅力を伝える使命を担っている貴重な読み物である。季刊高知が持つ、情報の深度とは、信憑性 (安心)・社会的意味 (土佐人に土佐の自然・人の良さに気付いてもらう)・情報発信者の強い意思 (土佐の魅力をPRしたいという昔から変わらない強い気持ち) であると考えられる。季刊高知が大切にしている情報の深度を活かした活用方法を提案すれば、より一層高知の隠れた魅力を高知の人々に発見してもらうことができ、地域活性化に繋げることができるはずである。深度を追い続ける高知の情報誌、すなわち高知愛に特化した情報誌で地域活性化を図るにはどのようにすればいいか考えた。

## 7. 提案

新しい季刊高知の利用法として、高知の大学や特別セミナーなどの教材として、季刊高知英語版を利用することを提案する。季刊高知英語版は、現在無料で公開されており、誰でも無料で見ることができる。しかし、野並編集長曰く、こちらはまだ活用しきれていない段階であるということであった。

そこで、教育分野にこの季刊高知英語版を利用すれば、グローバルな人材育成を行うことができるのではないかと著者は考えた。

## 8. 日本・高知における英語教育の問題点・課題

日本は、近隣の韓国、中国などに比べて、英語教育が遅れている傾向にある。以下の図は日本・中国・韓国の英語教育事情を比較したものである。

	日本	中国	韓国
小学校英語必修化時期	2011年 (※2002年より解禁)	2001年	1997年
小学校英語開始学年	小5～ (※総合学習：小3～)	都市部：小1～ 地方：小3～	小3～
小学校英語時間数	週1時間	週5時間～10時間	小3～：週2時間 小5～：週3時間
小学校英語履修単語数	285語	700語	450語
小中高履修英単語数	3,285語	5,750～6,150語	7,050～8,200語
中学英語教科書の本文の分量比較	1 (※日本を基準値とする)	4～6	2.5～4.5

(本多 功「アジアの英語教育事情」[http://ocean-gnet.com/images/pdf/asia\\_jijyou.pdf](http://ocean-gnet.com/images/pdf/asia_jijyou.pdf))

原因として、英語を学ぶことに対する目的がはっきりとしていないことが挙げられるのではないかと考える。近年の日本の英語教育は受験科目としての位置付けが大きく、高校、大学に合格するための手段にとどまっているように感じられる。グローバル化が進む現在、日本はより一層、英語教育、特に実践的な英語学習の活性化に取り組み、世界に取り残されないように発展していく必要がある。

高知県においては、近年外国人観光客が増えている傾向にあり、国境を越えて多くの人々に高知県をアピールできるよう、グローバルな視点を持った人材育成を行う取り組みがより一層普及していくべきではないかと考える。加えて、高知県は高地で非常にスポーツの合宿などを行うのに適した土地である。その為、日本語を使うことができない外国人選手も多く高知を訪れる。

こういった機会を活かし、高知県の魅力について説明できる人材がいれば、高知はより一層グローバルな発展を遂げることができるのではないだろうか。

## 9. 高知愛英語検定

季刊高知英語版が持つ、教材としての特色は、「高知愛」を英語で伝えているという点であると著者は考える。季刊高知は、野並編集長がインタビューの際おっしゃっていたように、高知の魅力、地元愛を題材にした地方誌である。その特性を活かし、グローバルな視野を育ててもらうための授業の最終目標は、「高知愛」高知へのこだわりを英語で表現することとする。その目標を達成するために教育段階を以下の3段階に分けた。

初級：「高知愛」、高知へのこだわりを表現する単語・熟語・文章の習得

中級：他者の「高知愛」、高知へのこだわりの理解と表現

上級：自らの「高知愛」、高知へのこだわりの表現

初級では、季刊高知英語版に良く出てくる単語・熟語・文章を習得することで、「高知愛」、高知へのこだわりを表現するための基礎を作る。初級で利用する教材は、テキストマイニングを用いて、ジャイアントインタビューや、紹介記事から、よく出てくる単語・熟語・文章を抽出して作成する。

中級では、季刊高知英語版の記事を利用して、長文読解問題を解く。記事に載っている他者の高知愛を、初級で得た基礎力を利用して理解してもらうことが目的である。

上級では、初級、中級で学んで来たことを活かして、自身の「高知愛」をプレゼンしてもらう。上級で最終目的である、「高知愛」高知へのこだわりを他者に伝えることができるようになってもらうことが狙いである。

## 10. 効果と評価方法

高知愛を英語で他者へ伝えられるようになることの利点は、学習者の種類によってそれぞれ異なる。この学習を行ったうえで考えられる学習効果は次の3つである。

(英語活動に積極的に参加している人)

実際に外国人観光客などに高知県の施設やお店、特産物等の説明を行う際、非常に役に立つ。

(英語活動に興味はある人)

高知愛英語検定での学習が自信につながり、英語を使ったイベント活動に参加する意欲を生み出す。

(英語活動に特に興味がない人)

就職活動の際、意欲的に取り組んだ学習として企業にアピールすることができる。現在、グローバルな人材は様々な企業で求められる存在であり、自分の学び舎がある県について英語で話せるという能力は、素晴らしいアピールポイントになるはずである。

高知で暮らしているからこそ当たり前になってしまっている高知の文化等を、英語でPRするためには、英語だけではなく、高知の魅力も共に勉強する必要がある。内山節の著書の中に、高校の地理の先生をしていた三澤勝衛氏はグローバルな学習についてこのように述べていたと著されていた。

例えば世界地図を見せて、「世界には〇〇山があり、××川があります」と薄く教えたところで、そんなものは何にもならないということなのです。そうではなくて、自分の郷土にどのような風土、つまり自然の流れがあって、そこにどのような営みがあって、どのように人間たちが生きているのか。それを深く知ったときに、実は同じような場所が世界中にあることを理解するわけです。(『未来についての想像力』(2009) p42) グローバルな視野を育てるためには、ただ知識を詰め込むだけでは足りない。学習には工夫が必要である。英語が得意なだけでも、高知に詳しいだけでも、高知県を世界にPRすることはできない。英語と地域活性の学びを同時に行うという新しい授業方法はグローバルな人材育成に必要な要素であるのではないだろうか。

高知愛英語検定の評価方法は最後のプレゼンテーションの際に、各々自身が思う高知愛、こだわりをどれだけ相手に伝えられるかで判断する。初級、中級はあくまで上級の為の準備であって、英語を覚える事を最終目標とするのではなく、高知愛を英語で伝えることに特化した授業とする。

### 11. テキストマイニング

初級教材を作成するにあたって、まずはテキストマイニングを用いて、季刊高知英語版に良く出てくる単語(名詞・形容詞・副詞・動詞)を抽出した。

### 12. テキストマイニングの結果

現在ホームページで公開されている、季刊高知英語版のNo.

58~61 でテキストマイニング行ったところ、二回以上登場した単語は、名詞 2036 語、形容詞 714 語、副詞 256 語、動詞 720 語という結果になった。

### 13. 結果の利用法

今回得ることができたデータを利用すれば、高知愛アピール頻出単語リストを作成することができる。リストを作成して、実際の使用例を明記しておけば、初級でテキストとして利用することが可能である。実際の使用方法は、KH coder を利用して季刊高知英語版に出てきた文章から取り出した。

### 14. 高知愛英語検定初級

今回は入手したデータから、それぞれ上位 20 語を利用して、実際に高知愛アピール頻出単語リストを作成した。抽出結果と、授業でのリストの利用方法を説明する。作成を行う際、英単語の使用例は、季刊高知に出てきた文章を利用した。これには、中級での長文読解、上級で発表する際の英文の作成をスムーズにする狙いがある。高知愛アピール頻出英単語リストと、それぞれの品詞についての頻出度傾向はこのようになっている。

名詞

1. people (382) : I became interested in the people that would custom these local bars
2. year (362) : I was surprised to hear that she came back to Kochi for the first time in 30 years !
3. time (342) : guests spend a precious and irreplaceable time.
4. day (252) : If you stay in Kamikoya for a few days, you may find that you've gained a new sense of values in your life and in your work.
5. product (188) : Around Oroshi-danchi, four branch shops with a good variety of local products cluster together.
6. sake (169) : He used to drink whiskey or Kochi sake.
7. place (160) : this is a place where you can feel like you're in a faraway foreign country without leaving Kochi.

8. taste (152) : a rich range of various different kinds of tastes
9. fish (151) : For example, a fish dealer told me when he said to a customer, ‘‘I like your lipstick, you look nice today,’’
10. store (147) : we do not have a store that sells all seven brands as the ‘Sun River Shimanto’ does in Shimanto in Hata County.
11. way (143) : I imagined that the best way to study how to make films was to make a film myself.
12. guest (138) : a place to entertain guests from all over the world with fine dishes and accommodation
13. work (133) : provide delicious foods fresh from the farm
14. food (129) : If you stay in Kamikoya for a few days , you may find that you’ve gained a new sense of values in your life and in your work.
15. restaurant (129) : A café and restaurant using local products, original sweets made with roasted tea leaves
16. customer (126) : Customers are curious to see them and find it refreshing to touch them, move them and, after picking them up and finding them interesting, will take one to the cash register to purchase. One piece is 300 Yen.
17. rice (121) : A popular soft rice cake made with roasted tea leaves.
18. room (121) : the second floor, you find the classy Japanese style room with the ocean on the wall, Katsuo Room.
19. dish (114) : He fully utilises this power to make dishes that tantalise his customers’ tastes buds.
20. water (105) : they take the tofu out of the mould carefully and with a blade cut the corners of the tofu and release it back into water.
- Photographer’s Association -LRB- APA -RRB- and The Japanese Society for Arts and History of Photography.
2. many (192) : I greet as many guests as possible
3. local (189) : I once took the local line, the Nahari Line, when I visited Takashi Yanase’s birthplace.
4. other (178) : a famous Japanese actor, and some other actors have come to visit here.
5. own (159) : My mom often composed her own poems.
6. great (151) : we think how we should arrange everything and how we can give them great care for a comfortable stay
7. such (151) : We’re located in such a discreet neighbourhood.
8. best (109) : This is the best hour to enjoy the charms of Oroshi-danchi : absolutely cool and different from daytime.
9. new (102) : the box where I have set aside the salt there will be new salt growing.
10. different (90) : In a year, we harvest 25 different species of vegetables to pickle.
11. good (88) : it is popular and at times the good parts of the fish are quickly gone.
12. first (84) : he was struggling to understand and complete his work in his first few years.
13. important (82) : Balancing work and rest is an important factor.
14. more (81) : I won’t cry any more.
15. various (81) : He is a Photographer for Tourism Posters and Various Advertisements.
16. fresh (78) : The tomatoes are fresh enough.
17. next (77) : A place to pass on to the next generation.
18. special (75) : Features Beautiful Facilities and Artistic Hotels in Kochi Special Edition
19. delicious (72) : This results in an image of a delicious, scrumptious, natural oyster that was taken fresh and still hanging on to the rocks near the ocean.

#### 形容詞

1. japanese (204) : A member of the Japanese Advertising

20. same (70) : You can't judge everybody by the same yardstick.

#### 副詞

1. not (689) : At that time compositing was not digital but photo-composition.
2. also (281) : Rooms and bathtubs are space-saving, and the room fixtures are also basic, but never inconvenient.
3. just (247) : At first we just wanted to put some value to Mihara rice and applied for 'doburoku special ward' to get a license to brew sake.
4. even (189) : Even Kochi locals would like to stay at Jyoseikan to feel true hospitality.
5. so (180) : Walking to and from your cottage to the main building can be quite a stroll and with some sharp steps, so be sure to check with the staff if you need assistance.
6. only (148) : He went from one notable restaurant to another, not only in Japan, but in Europe, also and read many cookbooks.
7. then (136) : Then carefully placing one on the other, he would beautifully prepare the Wagashi and make sure the Tsubu-an did not spill.
8. really (135) : Some people really care about taste of coffee.
9. now (125) : Leather is now the main material he uses.
10. here (122) : Leather is now the main material he uses.
11. well (113) : They enjoy breakfast, which is well known for its fresh-baked bread and delicious salad, and the cuteness of the tableware.
12. very (105) : It doesn't look so good but it tastes very good, because seasonings slowly soak into the bonito tuna.
13. as (90) : I tried to collect as many opinions from our customers as I could
14. always (88) : I always try to be aware and keep conscious of the city whilst I do marketing.

15. together (86) : I thought I should keep my back much straighter.

16. back (69) : After coming back to port, we iced down the crabs and washed them so as to make them look delicious when boiled.

17. too (66) : On the other hand, if we mix too much brine, the water would evaporate too much from the tofu and it will end up dry and broken up''.

18. yet (66) : Talking with the artists is good fun, too. I really hope a lot of people will come and visit us.

19. more (65) : I became more acquainted with the foreigners visiting and the idea of a youth hostel.

20. however (64) : However, it progressed far more quickly than I'd guessed, and in around one year, movie theaters with only a film projector would have had nothing to show

#### 動詞

1. be (4275) : The hotel logo was created by a Kochi designer.

2. have (1219) : Although all the staff have got old and they had to close the shop ¥¥itself, their skills have never been lost

3. do (564) : I'm keeping searching for the best way to go, and doing any kinds of gigs and shows I can.

4. make (504) : He made Ino-cho his base, and started training in making washi, to become a paper craftsman.

5. think (349) : This is the way of thinking for the base on how we plan.

6. use (321) : As this area is a cliff we decided to use scrap wood and driftwood as materials to build it.

7. take (313) : I realised I would be the 5th owner to take over the store, after heading into society.

8. come (300) : In 1980, six months after he first encountered washi paper, he came to Japan and

- visited a number of papermakers.
9. start (281) :we start washing the fish straight off the boat.
  10. go (261) :After graduating High School, Doi went to Matsuyama City in Ehime prefecture to study at a culinary school. Following that he went on to study and train in Osaka, Matsuyama and in restaurants within the prefecture.
  11. want (241) :I want people to feel all the connections between washi paper, the accommodation, the food, the scenery and the environment.
  12. see (223) :As a result, the product saw great sales.
  13. work (194) :He was able to do everything by himself thanks in part to his experience working in Kyoto.
  14. get (190) :When we got the guesthouse license, there were some building regulations, so we made the kitchen a common space.
  15. feel (185) :The most important thing is that they enjoyed it and that they feel like coming back to our store.
  16. find (183) :I found that the people coming to stay were nice people and I felt at ease.
  17. enjoy (168) :So depending where you are in Japan, there are new ways to enjoy the exhibition.
  18. say (168) :Not only is the view from this onsen a spectacular sight, the amber waters are said to almost equal the waters of Arima onsen, with many onsen fans coming from all over the country.
  19. look (134) :Just from this season , and looking at their practice sessions, do you see any promising players?
  20. become (126) :it had started to become a big party instead of a vigil.

名詞では、food、restaurant、taste、fish、rice 等、食べ物を表現するための単語が多く見受けられた。形容詞でも、fresh や delicious のような、食べ物を紹介するときに使われる単語が多かった。高知には紹介すべき美味しい食べ物が多く存

在しているということがわかる。副詞は really や always など、高知で働く職人を紹介するための単語が多く見られた。

高知愛英語検定初級では、このリストを使って二人組で授業を行う。リストには、do や be 動詞などの比較的誰もが知っているような単語も含まれている。初級の目的は、単語を覚えることが目的ではなく、高知県を PR するうえで、頻出単語をどのように使うかを覚えることが目的である。学習の際は、二人組のうちの一人が語句を読み上げ、もう一人が意味を口頭で言う。一単語につき一人一回ずつは意味を口頭で言うように時間を配分する。わからない単語や理解できない熟語について二人で話し合う時間も設ける。授業を口頭で行う理由は、実際には上級で英語でプレゼンテーションをしてもらうために、英語で話すトレーニングを行ってもらったためである。その際にわからない部分を二人で話し合うことができれば、一人で黙々と単語と例文を眺めるよりも、学習にやる気生まれるのではないかと考えた。

しかし、このままの授業では、季刊高知の深度、高知愛を活かしきれていない授業になってしまっているように感じた。季刊高知英語版から抽出した例文すべてが、必ずしも高知県を PR する文章ばかりではないからである。季刊高知の深度を活かした活用方法を提供する以上、著者自身の研究も深度を追ったものでなければならない。

そこで、初級の授業に、外国人留学生に参加してもらおうという案を付け加える。授業には一回の授業に2, 3人ほど参加してもらおう。内容としては、先ほど説明した二人一組での学習後、留学生には見えないようにして、ペアごとにそれぞれ異なった高知県の特産物の名前が書かれたカード（日本語）を配る。ペアごとに、高知愛アピール頻出英単語リストを駆使しながら、留学生に特産物の説明を行ってもらおう。このようにすれば、より一層高知愛に重きを置いた授業となる。それに加えて、日本人同士で行うより、外国人に実際に説明する形をとった授業の方がより実践的で生徒のモチベーションも上がりやすいのではないかと考える。英語を使う、英語で伝える楽しみをこの初級で味わってもらい、学習者の内発的動機付けを高めることも狙いの一つである。

## 15. 高知愛英語検定中級

中級では、初級で得た知識を活用して、実際に季刊高知英

語版の記事を使った長文読解を行ってもらおう。毎回、授業を行う前に予習プリントを配布する。これは、事前に予備知識をつけてもらい、より一層他人の高知愛を理解しやすくなっ  
てもらうためである。中級の目的は、初級の知識を活かしつ  
つ、他者の高知愛を理解することにある。その目標を達成さ  
せるために、季刊高知英語版の記事で長文読解を行った後に  
感想をそれぞれ英語で発表してもらおう。ただ長文読解を行  
うだけでは、普通の英語の授業と同じになってしまう。他者  
の高知愛を読み取って、それを伝達するという目的をはっきり  
させることで普通の英語の授業よりも、学生の意欲を掻き立  
てることができるのではないだろうか。

この授業で取り扱う予習プリントについて説明する。季刊  
高知の記事の特徴は、高知の食べ物、施設の紹介をする際、  
働いている人にスポットを当てている点である。以前、イン  
ターンシップやアルバイトで取材に同行させてもらった時に、  
メモを取りながら取材の様子を見ていて特徴的だと思ったの  
は、お店の商品は勿論だが、それ以上にお店で働く方々の写  
真を非常に多く撮影する。インタビューでは、お店でのルー  
チンワークについては勿論、休みの日の過ごし方やお子さん  
のお話、趣味について等の質問も行っていた。お店の外見、  
見える部分だけを紹介するのではなく、お店を開くまでの経  
緯、過去の苦悩、高知での生活等、働き手の人生の表現に重  
きを置いている。そういった季刊高知の紹介記事の特徴を活  
かすため、予習プリントでは、紹介記事やジャイアントイン  
タビューに登場する働き手の過去、現在、これからの展望に  
ついて読み込んでいるかを図るための質問を出題する。

ここで、インターンシップで取材に同行させて頂いた、季  
刊高知英語版 No. 58 柴田ケイコ氏のジャイアントインタビュ  
ーの記事で質問内容の例を提示する。

Keiko Shibata

- Q1. What did she start drawing?
- Q2. Which college was she going to?
- Q3. What did she learn there?
- Q4. What inspired to change her style?

絵を描き始めたきっかけなどのバックグラウンドから、子  
供ができてから、作品に対する思いがどのように変化したか

等、柴田氏の人生の流れをくみ取りやすくできるように心が  
け、質問を作成した。

このような予習プリントを利用して、実際に授業で長文読  
解、乾燥発表を行えば、高知愛を英語でアピールする力をつ  
けるだけでなく、高知人の素晴らしさをより身近に感じるこ  
とができる授業にすることができるのではないだろうか。

## 16. 高知愛英語検定上級

上級では、初級、中級で学んだことを活かして各々自身の  
高知愛について、パワーポイントを使ってプレゼンしてもら  
う。プレゼンの時間は一人につき 5 分で、パワーポイントの  
枚数の制限はなしとする。題材は高知県にまつわるものであ  
れば特に制限はない。評価の方法として、中級で説明した季  
刊高知の特徴のように、ストーリー性がしっかりしているも  
の（単なる施設の紹介や特産物の紹介を行うだけではなく、  
働き手の過去の苦悩や今行っている取り組み等を発表に含ん  
でいるもの）は、加点の対象とする。また、留学生にもこの  
授業に参加してもらい、高知愛が十分に感じられたかを評価  
してもらおう。

## 17. 総括

本研究は、以上の新しい季刊高知英語版の活用方法を提案  
するという形で終了させていただく。季刊高知英語版は非常  
に高知愛にあふれた素晴らしい教材である。同時にこの地方  
誌は高知でしか作ることができないものではないかと著者は  
考えている。自然豊かで、おきやく文化から見られるような  
人と人とのつながりを大切に生きている土佐人だからこそ、  
心にゆとりを生み出すことができ、こだわりを迫及すること  
ができるのではないだろうか。全国経済同友会セミナーの講  
師として来高したブータンのジグミ・ティンレイ首相は、高  
知についてこのように述べている。

美しい自然があり、静かな暮らしを送る環境が整う高知の  
人々は、必ず幸福を見いだせる。都市の暮らしで物質的に満  
たされても幸福は得られない。雑踏の暮らしは家族や友人と  
のつながりをなくし、孤独を感じる。幸せの鍵は人々の関係  
づくり。（『高知新聞』2010年4月16日）

季刊高知を通して高知県の魅力に気づいてもらうという野並  
編集長の意思是、高知で暮らすことの幸福さに気付いてもら



いたいという願いなのかもしれない。今後、大学の授業としての利用にとどまらず、訪問外国人へのガイド、海外への地産外商を担当するビジネス人・県庁職員の方々等にも、教材として利用されて欲しい。今回研究で作成したテキスト及び授業案が、高知県の新しい英語教育の発展に繋がれば幸いである。また、この研究を始めたきっかけは、季刊高知を通してより多くの人々に、地元について多角的な視野を持って考えるきっかけを与えるということである。SNS の発展に伴い、人々の得る情報が焦点化している中、今回提案した活用法によって、高知県の素晴らしさを多角的に捉え、グローバルな視野を持って発信することができる人材が増えることを願う。そして最後に、この研究にご協力くださった株式会社クリケット季刊高知編集部の野並良寛編集長に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

## 参考文献

- 【1】 藤竹暁 (2012) 『図説 日本のメディア』 NHK 出版
- 【2】 社納葉子 (2011) 「インターネットで中傷され続けた 10 年スマイリーキクチさん」  
<[http://www.jinken.ne.jp/flat\\_now/kurashi/2011/11/25/1335-2.html](http://www.jinken.ne.jp/flat_now/kurashi/2011/11/25/1335-2.html)>2018 年 12 月 22 日アクセス
- 【3】 「新潮 4 5」編集部 (2009) 『凶悪 ある死刑囚の告発』 新潮文庫
- 【4】 KIKAN KOCHI English Version <<https://www.k-cricket.com/english/index.html>>
- 【5】 (株)オーシャングローバルネットワーク OCEAN ENGLISH CLUB 本部 代表取締役 本多 功 「アジアの英語教育事情」 <[http://ocean-gnet.com/images/pdf/asia\\_jijyou.pdf](http://ocean-gnet.com/images/pdf/asia_jijyou.pdf)>2019 年 2 月 2 日アクセス
- 【6】 内山節 (2009) 『未来についての想像力』 農文協 p42
- 【7】 「高知は羨望の的に」 『高知新聞』 (2010 年 4 月 16 日)p3